



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十三号（一日発行）
平成六年十二月一日

北海の古平風土物語（二九）

親しい級友・海田綱市君 一
大正十四年・高等科二年 担任 千葉信夫先生

高橋源五

- 親しい級友、海田綱市君
- 牛の海田、三代目当主の海田君
- 化け物退治「剣道達人」の海田君

1. 牛の海田、三代目当主の海田君

高等科に入って、海田綱市君と同級になった。

受持ちの先生は、この春、札幌師範学校を出たでバリバリの千葉信夫先生であった。

海田君はなかなかの元気で学級では、いつも良いことでも悪いことでも遠慮なく、先頭を切って先生にも言う。活発に発表する型であった。

ふだんはニコニコしているが一度こうだと決めて言い出すとなかなか後に引かない。曲がったことは大嫌いで、物事をやり通す固い意志を持っていた。

背が高く、腕っ節も強く、声高でよく動き、よく働く行動力があつた。学級で、学校で、何かが起こるたびに、良きにつけ悪しきにつけ海田君の名が出るという、クラスの人気者でもあつた。そんなことがたびたびで時にはコブも出ていたことを思い出す。

彼の祖父は明治二十年代、広島県で牛飼いが盛んであつた郷里の三品地方から渡道して、当時、鯨漁が盛んであつた美国町の川上地区に定住した。美国川上流から婦美・野塚地区方面にかけての積丹岳山麓一帯に、約七十町歩余りを入手して開拓を

続けた。

乳牛を飼育し、牛乳の生産・販売と、畑作、造林業をもあわせて始めた人だという。

早くから一族で合資会社を組織して、全員でこの仕事に当たり、大家族主義の下で伝統的にこの道一筋で生きて来た、牛の海田、と言われる程の家であつた。

また、北海道の酪農関係の元祖でもあつた。乳牛の飼育、改良の面では業界に貢献するところが大変大きかつたという。（これは、当時、後志家畜委員

● 鯨漁のこと
鯨製造法 ②
身欠きや外割（ほかわり）は納屋に掛けておき三十四、五日ほど干してから結束する。鯨をつぶすとき、数の子や白子、笹目などをより分けるが白子や笹目は本州方面へ送り田畑の肥料にする。近江・美濃（滋賀県・岐阜県周辺）などではみんなこの肥料を使う。ほかの肥料を使うよりも田畑によく合うという。白子は食用にもする。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

宗谷地方では白子をゆでてごま味噌であえて食べるが、いたって風味が良いという。
数の子は、腹から出してすぐ干すとバラバラになつてしまふが、大樽に入れて二、三日ねかせておくと固くなるのでそれから干すとよい。鯨が群来ると海が真っ白になり、一日に何回も海に網を入れる。風が強くなると時化て来る時は、せつかくの鯨を多く捨てることもある。

をしていた、長兄の小野寺地作の談話である）
彼は、牛の海田、といわれたその三代目の当主の身であり、こうした家庭環境から彼の強い精神、性格と、旺盛な行動力が生まれ出たものと思われる。
美国町にあつた自宅（本社）から美国小学校へ通学していたが、距離が遠く、通学にも困難であつたことから、以前から開いていた古平町新地町の牛乳販売所に一族の子どもたちを集めて、古平小学校新地分教場に通学をさせていたのである。

文化の日

明治節とは 忘れぬ

かつて国の祝日のひとつであった、十一月三日の『明治節』が、昭和二十三年に（一九四八年）『文化の日』と改められたわけだが、天候も定まり、菊薫る好天であることが多い。北海道に育った我々は、いつも明治節という小雪が降るのが珍しくなかった。今年は温暖だった

故郷を想ひ 福井孝平

せいか、雪は無かったがあいにくのわか雨だった。

例年、町の文化祭発表会には文化会館の駐車場がいっぱいになるほどの人出があるが、今年も雨の中、例年に劣らない人出で賑った。

朝から午後五時ころまで、各流派の踊りやら、合唱、詩吟、太鼓、カラオケ、ブラスバンドなど、加えてチャリティお点前まで盛況であった。

会場の都合で、展示会は十月二十七日から十一月二日まで太陽の間に、お花、菊花、書道、

絵画、写真、造花、七宝焼、短歌、俳句その他の作品を展示したが、吉平文化団体の底力が見られ心強く思えた。

私が、ちよっとロビーで休んでいたら、ひとりのおばあちゃんに声をかけられた。

「福井さん、今日は明治節だよネ」

「あれ？ そうだったか——」
と、改めておばあちゃんの顔を見た。

「うんだ、うんだ。明治節だよ

なア。おばあちゃん、明治節の歌知ってるかい？」

と尋ねたら、若々しい美声で、始めから終わりまで歌い切ったのには驚かされた。誰あろう、このおばあちゃんは泥の木の工藤つえさんだった。以前は、産婆さんをしていた方だと思われて、青森からお嫁さんに来られて、ご主人に先立たれ、今は本陣町で独り暮らしのこと。ちよっとの間だったが、やア楽しかったこと。

「雲にそびゆる高千穂の——」
私、小声で歌った（下段へ）※

丸山の守護神

恵比須神社の思い出

渡 辺 ハ ツ エ

永く丸山の下に住んでいて、丸山を見ながらふと思ひ出すことがあります。

丸山のふもとに何十年前も前から、おそらく大正時代か——、恵比須神社が建っていました。通称『恵比須さんの道路』と言われていた小道もあって、物心ついたころから、私の知る限りでは年に一度の秋祭りも行われていました。

お祭りの当日には、あめ屋のじいちゃんが鐘を鳴らして、自家製のあめを売っていたものです。白い板あめと、はしにからんでくれる水あめがありました。が、いくらだったか、はつきりと思ひ出せませんがとてもおいしかったです。

※ てみたが、歌詞はほとんど忘れていた。昔、歌った経験のある人は、多分メロディは覚えていることでしょう。おばあちゃん、来年の『明治節』にもおいで下さい。歩いて行くうしろ姿もシヤンとしていた。

七福神のひとつでもある恵比須さんに、漁師さんたちは安全操業と豊漁を祈って信心していました。戦時中に、空襲警報のサイレンが鳴り出すと、神社は町民の避難場所にもなっていました。

昭和二十四年五月十日の大火で、神社までも焼失してしまつた。冬になって雪が積もると、神社の跡地は子どもたちの格好のスキー場となって、私の長男も小学生のころは「えびすさんさ、スキー滑るに行ぐベエ」と、友達を誘っては、日の暮れるまで元気に滑っていたものでした。

丸山も数年前から樹木が伐採され、雪崩防止の柵が設置されて、恵比須神社が建っていたころの面影は全く無くなつてしまいました。ちなみに私は、丸山の雪崩などは一度も見ただけありません。麓に人家が立ち並びようになると、人命の安全を守るためには、これも止むを得ないことだと思っております。

遙かなる故郷の思い出 3

橘 義 春

人魂（ひとたま）の話（一）

丸山の高台にあった、新地分
教場に通っていたころの出来事
だった。

私の家は丸山町の川沿いにあ
ったが、隣りは親戚で、そこに
は同級生の勝由君（愛称が勝っ
こ）がいて、彼とは学校へ行く
のも遊びもいつもいっしょであ
った。

天気の良いある冬の日。二人
で雪を積み上げて横穴を掘り、
かまくらのようなのを作って大
汗をかいた。

「勝っこ、湯っこ屋（ふるや）
サ行くべ」

「ンだなア、いぐいぐ」

「晩ンげママ（晩ご飯）食った
ら迎えさいぐから、待ってでケ
レ」

夕方二人で、タオルと石けん
箱を持って新地の花の湯に出か
けた。そのころの料金は、たし
か大人が十銭で、子どもは五銭
ぐらいだった。中へ入ると大人
はたった一人で、あとは子ども
ばかりで、体を洗うのもそこそ

こにしては、湯舟の中で潜った
りして遊んでいる。ふる屋は、
子どもたちにとつて社交場のよ
うな所であった。

たった一人いた大人の人は、
磯廻りをしていた宮森のおじさ
んだった。おじさんは一杯機嫌
で子どもたちを相手に、昔、戦
争にいったときのことを、怪し
げな支那語を使って得意になつ
て話し、みんなはすっかり聞き
ほれてしまつて、そんなことで
ふる屋で二時間ぐらゐも遊んで
しまった。

表に出るともう真つ暗だった
が、雪明かりで懐中電灯もちよ
うちんもいらなかつた。長湯し
たので体はポッカポカ、外の空
気はひんやりとしていて気持ち
が良い。新地の町を齊藤六さん
の店の方に向かつて、道の真ん
中をブラブラ歩いていたら、み
どり小路に入る角の越後屋旅館
（と記憶しているが）を過ぎ、
安藤とうふ屋さんと医院だった
ような気がするが、突然家の間

から円いピンクがかった、サツ
カーボールより少し小さいよう
な玉が、地上四十センチぐらい
の所を上下に揺れながら、ユラ
リ、ユラリと飛んでいく。
「おい、勝っこ、あれなんだべ
「どごよ」

「ほら、前の家の軒下を見れ、
赤いような玉っこが飛んでいぐ
べさ」

「うそコゲ、おらアに何もめエ
ねエ（見えない）ど」

「あれめねエが、電信柱の前サ
いくベサ」

「おめえ、湯っこサ入り過ぎで
頭が少しハンカクサクなつたん
だべ」と、きたもんだ。

これ以上話しても駄目だ。黙
つて玉を見ていたら、みどり小
路を横断してフワツと上にあが
り、商店の裏の便所らしい窓に
消えていった。とたんに体にゾ
クゾクとさむ気がした。

家に帰ったら、祖母がストー
ブを燃やして待つてくれた。
さつき見たとおりのことを話し
たら、

「ウン、それはきつと火玉（人
魂）だべ。おらもわらす（子ど
も）のころ見たことがある。な
んもおつかねエもんでねエ見え
る人と見えねエ人があるつて話

聞いたことがある。勝っこはき
つとそれだべ」
次の日、人魂が飛び込んだ家
の年寄りが死んだという話を聞
いて、「あれはやっぱり人魂だ
つたんだ」と、今でも信じてい
る。

この人魂を見たことを友達に
しゃべると、いざれ勝っこの耳
に入るだろう。そしたら勝っこ
は、また、

「このうそコギ、そつたらハン
カクサイ話、やめでケレ」と、
言うだろうと思ひ、祖母以外の
誰にもしゃべらなかつた。

その親友の勝っこも、小学校
を卒業して二年目に、天国から
お迎えが来て逝つてしまった。
悲しい思い出もある。

『モツコ岩』か 『モツケ岩』か

沢江と歌棄の境の辺りに特徴
のある岩があり、よく目立つこ
とから親しまれているが、その
名前となるとどうもはっきりし
ない。昔から「モツコ岩」「モ
ツケ岩」「カエル岩」といろい
ろある。どうも「モツケ岩」が
正解らしいがどうでしょう。

私の見たにしん場風景

竹内 コト

網も入れ、あとはいいよよと鯨を待つばかりとなりました。各地の鯨の漁模様が新聞などで伝えられると、浜も活気にあふれてきます。やがて、町内のどこそこの漁場で鯨が掛かったというとき、親方も漁夫たちも目の色が変わってきます。

雲行きや風の具合をみて、船頭さんの指図でいっせいに動き出します。沖では、船頭さんが建網から引いたさぐり(糸)を手にして、鯨の掛かり具合を見計らっています。鯨が寄って来ると、廻りの建網でも一斉に網を起し始めますが、隣の網に入っても、こっちの網には全く入らない時もあります。

漁が良いと沖の舟から陸に合図があり、小舟が漁の模様を知らせに来ます。桙船に入り切らない時には、代り桙といって、代りの船が網に入った鯨を運びに行きます。

浜ではもっこしよいの人たちが待っています。大漁のときなどは町中の人ばかり出されま

す。そんなときは乳飲み子でも母親から離されて、ワンワン泣き出すのをあとに残してでも浜に出かけたものです。昔は兄弟(姉妹)が多かったので、そんなときには年上の者が親の代りをして、弟や妹の面倒をよくみためものです。また浜が忙しくなると、子どもたちももっこしよいをしました。鯨漁のころは海

【今日日はこんな日】

再三の改修工事を経て

古平・美国間海岸道路完成

[昭和40年]

余市から古平、美国にかけては海産資源が豊かであったが、地勢がけわしく、昔からようやく人が歩けるくらいの道しか無かった。

古平・美国間は明治十三年ころから何回か部分的な改修をしてきたが、車馬の通行にはなお困難な状態であった。この区間の道路改修が全面的に行われたのは、大正時代になってからの

が荒れることが多く、そうなるにせつかく獲った鯨も船から捨てたり、流されたりするので陸揚げは急がなければなりません。大漁したときの浜は、それこそ戦場のような騒ぎになります。

鯨を積んで舟が浜に着くと、ゆらゆらするあゆみ板を渡ってもっこしよいですが、廊下(倉庫)に立てた簀の子(すのこ)に山盛りになるまで鯨を積み上げて行きます。



▼道 費

合計 九、五〇〇円

このようにして改修工事が行われたが、融雪期の土砂崩れにより、大正五年には道費のほか古平町が一五〇円を負担して、また道路の改修を行った。

その後昭和三年になり、道費四千三百円で新地町の上に新道(現在の旧道)が作られ、当時の新地分教場裏に切り通しの道路が開かれ、どうやら自動車を通れるような道路が開通した。

昭和三十二年、古平・余市間の海岸道路が開通し、継続して古平・美国間の自動車道路の改良工事が検討され、昭和三十五年四月に三井建設工業株により着工された。

この区間での一番の難工事は丸山隧道であった。地盤の不安定なこともあり、落盤による圧死事故(大野一郎さん・当時五四歳)があった。

工事は約五年半をかけ、昭和四十年十一月に竣工した。総延長二千九百四十ヤ、総工費四億五千二百万円、これにより、余市から美国までは国道二二九号線として整備され、かつての陸の孤島の面影は今全く見られない。

ことである。

大正二年、岩淵町長は美国町と共同で道庁に陳情をし、労力と労賃をある程度負担すること、改修工事が始められた。

▼古平 町

労力 延三、五七〇人
賃金 二、五〇〇円

▼美国 町

労力 延八五六人
賃金 六〇〇円